

「フルート」外伝第十四話

ヒムカシの国

1

水平線に白い波が現れました。

泡立つ波頭がとどろきながら海を渡っていきます。横に長く伸びた波は、一列になって駆けてくる白馬の群れのようです。

いえ、それは本当に馬でした。白い水の馬たちがしがきを立てながら走ってくるのです。とどろきは、馬たちの蹄ひづめが海面を蹴る音でした。

すると、一頭の馬の背中から声がしました。

「見えた！ とうとう陸だぞ！」

がっしりした体に青い胸当てをつけ、大きな弓矢を背負った少年が、行く手を指さしていました。同じ馬に乗っていた少女も歓声を上げます。

「やったあ！ ついに上陸だね！」

少女は一つに束ねた緑の髪を風になびかせています。

隣の波の馬には金の鎧兜の少年が乗っていました。

「よかった。渦王の島を出発してからも丸五日だからね。そろそろ上陸しないと、食料が底をつくところだったよ」

ほっとしたように笑うその顔は、まるで少女のように優しげです。

鎧の少年の前には、もう一人、本物の少女が乗っていました。黒い

長衣と赤いお下げ髪を風にはためかせながら、自分の膝を見下ろします。

「ルルは大丈夫？ 疲れてない？」

そこには茶色の毛並みの雌犬が座っていました。聞かれて人間の少女の声で答えます。

「もちろんよ。自分で飛ばないでいいんですもの、楽なものよ。ポチ、あなたは？」

雌犬が振り返ったのは、隣を駆ける波の馬でした。水の背中に白い小犬が一匹だけ乗っています。

「ワン、ぼくも平気ですよ。フルート、陸の様子を見てきた方がいいんじゃないかな？ ぼくが風の犬になって行ってきましょつか？」

こちらは人間の少年の声です。フルートと呼ばれた鎧の少年は、穏やかに首を振りしました。

「いや、いいよ。波の馬は間もなく上陸するし、あそこがどんな場所かわからないからね。風の犬の姿はむやみに見られない方がいいだろう」

「ワン、それもそうか」

人間と犬なのに、会話になんとなく兄弟のような雰囲気漂います。

これが金の石の勇者の一行でした。

ドワーフの血を引く獵師のゼン、海の王と森の姫の娘のメール、金の鎧兜の優しい勇者フルート、天空の国の魔法使いのポポロ、そして、もの言う犬たちのルルとポチ。全員がまだ少年少女と呼ばれる年頃でしたが、彼らはれっきとした勇者でした。悪の権化のデビルドラ

ゴンから世界を守るために、中央大陸から渦王の島へ渡り、海の王の戦いを経た後、また西の大海を渡って、とうとう海の果ての陸地へたどり着いたのです。

「メール、あの陸地はどこなの？」

とルルに聞かれて、緑の髪の少女は首をひねりました。

「うーん、どこかな。あたいたちは父上の島からまっすぐ西に向かってきたからさ、たぶん、中央大陸の東側にたどりついたんじゃないかとは思っただけど」

「なんだ、頼りねえな。おまえは海の王の娘なんだろう？ そのくらいわかんねえのかよ」

ゼンに文句を言われて、メールはじろりとらみ返しました。

「こっち側へ海を渡ってきたのは初めてなんだもん、しょうがないじゃないか。だいたい、あれが大陸か島か、それもよくわかんないんだからさ。陸の手前には島がいっぱいあるものなんだよ」

「あれが島なもんかよ。あんなでかい島があつてたまるか」

「ゼンこそ無知だね。世界にはロムドやエスタなんて国よりずっと大きな島が、いくらでもあるんだよ」

「無知とはなんだ！ こちとら山のドワーフなんだ。海や島のことなんか知るもんか！」

「知らないんなら、あたいが知らないことになつて文句言うんじゃないよ！ 世界の海は広いんだからさ。その何もかもまでわかつてるわけじゃないか！」

「文句なんか言つてねえだろう！？ 俺はただ」

やりとりが喧嘩のようになっていきますが、実際にはこの二人は恋人同士です。すぐにこんなふうになり合いますが、仲直りもあつという間なので、仲間たちは誰も気にしていません。

「本当に、あそこはどこなのかしら？ 今度こそ、手がかりが見つかるかしらね？」

緑の瞳を輝かせて行く手を見るポポロに、フルートはそつとほほえみました。ポポロたちは、他でもないフルートのために、闇の竜を倒す方法を探して世界中を旅してくれているのです。

行く手に陸が迫ってきました。静かだった海面が次第に波立ち始めます。その上を波の馬たちは駆け抜け、海岸の白い砂浜に駆け上がったいきましました。ザザザザ……ツと水が砂をこする音が響きます。

すると、馬たちはいつせいにくるりと向きを変えました。今度は海へ駆け戻っていきます。馬たちの蹄が水面を蹴り始めると、また白いしぶきとどろきが湧き起こります。

けれども、その時にはもう、フルートたちは馬の背中から飛び下りていました。砂浜に立って馬たちに向かって大きく手を振ります。

「ありがとう、波の馬たち！」

「送つてくれてありがとよ！」

「父上たちのところに戻つたら、よろしく言つとくれね！」

ワンワン、と二匹の犬たちも高くほえます。

波の馬たちが白く伸ばした線のようになり、やがて水平線の向こうに見えなくなつていきます。

馬たちが去つても、海岸に波が打ち寄せる音は続いていました。陸からは木々の梢が風に鳴る音や、虫の声も聞こえてきます。虫は耳をふさぎたくなるほど賑やかです。

「蝉だね。父上の島にもいっぱいいたけどさ、鳴き声が違ふよ。場所によつて蝉の声も違ふんだね」

とメールが感心すると、ゼンが言いました。

「こう蒸し暑いと、蝉の声も耳障りだな。海辺で風があるつてのに、もう汗だくだぞ」

「ワン、もう七月ですからね。夏だもの、暑くて当然だ」

とポチが答えます。言うことは冷静でも、実際には舌をだらりと出して、暑さにあえいでいます。ポポロやルルは何も言いませんが、やはり、かなり暑そうにしています。

フルートだけは汗をまったくかいていませんでした。魔法の鎧兜を着ているので、暑さ寒さをまったく感じないのです。それでも、仲間たちのために木陰を探してあたりを見回しました。蝉が鳴く林は、砂浜をはさむ小高い丘の上にあります。暑い中、そこまで登っていくのは、ちよつと難儀です……。

すると、波の音や蝉の声に混じって別の音が聞こえてきました。たちまち犬たちが耳を立て、少年少女たちが、おやという顔をします。それは赤ん坊の泣き声だったのです。

急いで声のするほうへ行ってみると、そびえる大岩の陰に赤ん坊がいました。裸の体を布でぐるまれて、砂の上じかに置かれています。泣き声は砂浜中に響いているのに、近くに大人の姿はありません。

「捨て子か？」
とゼンが難しい顔になりました。犬たちがあたりの匂いをかいで、とまどいます。

「ワン、近くに人の匂いがしませんよ」

「匂いをたどれれば、この子の家がわかるのに。砂浜だからかしら？」
赤ん坊は、ほぎゃあ、ほぎゃああと泣き続けていました。岩が落とす影の中ですが、真夏の砂浜はかなりの暑さです。このまま放っておけば、すぐに死んでしまいます。

フルートは急いで赤ん坊を抱き上げると、ポポロに言いました。

「水を……。この子に飲ませてやらなくちゃ」

ところが、ポポロが水筒を取り出して赤ん坊に飲ませようとすると、ポチが止めました。

「ワン、そのままじゃ無理ですよ。お母さんのお乳しか飲めない赤ちゃんなんだもの、コップや水筒から水が飲めるわけがない」

「じゃあ、どうするんだよ。こいつらはまだ乳なんか出ねえぞ」

とゼンがメールとポポロを示したので、真っ赤になったメールから

ひっぱたかれます。

「何言ってるのさ、あたりまえだろっ！」

フルートはなんとか赤ん坊を泣きやませようとゆすぶりながら言いました。

「布を水に浸して、その布を吸わせてみよう。牧場では、母牛に死なれた仔牛に急いで乳を飲ませるときに、そうするんだ」

その時、フルートの腕の中で、赤ん坊の体が、がくんと沈み込みました。赤ん坊の体がいきなり重くなったのです。とつさにそれを抱え直して、フルートは仰天しました。赤ん坊はどんどん重くなっていきます。まるで大きな石の塊を抱いているようです。

「ワン、フルート!？」

「どうした!？」

ポチがゼンが驚いて駆け寄ろうとすると、今度はポポロが声を上げました。

「見て!」

フルートの金の胸当ての隙間から金色の光が洩れていました。強く弱く、またたくように輝いています。

「闇の敵だ!!!」

ゼンがどなり、全員はいつせいに赤ん坊へ身構えました。

2

フルートは赤ん坊を見つめました。

小さな体がどんどん重さを増していった、フルートには抱いていら

れないくらいになってきます。その上に、鎧の隙間から金の光が降りそそいでいました。金の石が放つ聖なる光です。闇のものであれば、たちまちその体が溶け出してしまいます。

ところが、赤ん坊には何も変化が起きませんでした。小さな手を拳に握り、顔を真っ赤にして泣き続けています。それを見て、フルートは赤ん坊を抱き直しました。

「闇の敵はこの子じゃない！ どこか近くにいるんだ！」
またぐつと赤ん坊が重たくなります。

すると、ルルが背中を逆立てて言いました。

「闇の匂いよ！ 出てくるわ！ みんな、気をつけて！」

その声が終わらないうちに、足下の砂浜から一本の手が現れました。後足をつかまれてルルがキャン、と悲鳴を上げます。ポチが駆けつけて手にかみつくと、たちまち悲鳴が上がって手が引つ込みました。

「地面の中だ！」

とゼンはどなって背中からエルフの弓を下ろしました。メールはすばやくあたりを見回します。自分に使える花を探したのです。丘の上の林に花が咲いているような気がします……。

フルートは必死で赤ん坊を抱き続けました。落とさないようにこらえるのがやっとで、敵に立ち向かうことができません。赤ん坊がますます重くなるので、両足が砂にめり込んでいきます。

すると、その砂の中から人の頭が現れました。しわだらけの痩せた顔をしていて、髪の毛はほとんど抜け落ちています。あまりしわだらけなので、男か女が見極めることもできません。大きな目玉でフルートたちを見回して、ケケケと笑い声を上げます。

「いた、いたア……！ ンまそうな人間たちが……いたア！」

フルートたちはぎよつとしました。砂の中から同じような頭がいくつも現れてきたからです。続いて砂をかき分けて体が現れます。それ

はどれもひどく痩せかけていました。腕や足は骨と皮ばかり、肋骨の一本一本まで浮き出て見える体の下で、腹部だけが異様に大きくふくらんでいます。

とたんに、ポチがウウツとつなりました。

「この匂い……こいつら、グールですよ！」

死肉食いと呼ばれる闇の怪物で、腹を減らしたときには集団で生き物に襲いかかることもあります。

「グールだあ！？ だが、それにしてもずいぶん貧相な連中じゃねえか！ 飢え死に寸前に見えるぞ！」

とゼンがどなりました。グールならこれまでも何度か戦ってきましたが、今日の前にいる怪物は、それよりもずっと痩せて、異様な姿をしていたのです。たちまち十数匹に増えて、彼らの周りを取り囲みます。

「ケケケ、久しぶりの人間、人間」

「ンまそう、ンまそうだあ！」

「食ウてやる、腹いっぱい食ウてやる」

「でもよオ、いくら食っても、腹アいっぱいにならねえんだよなア」

「だから食ってやるのさ。何でもかんでも、骨でも歯でも、爪でも服でも、髪の毛一筋まで残さねエで、全部食ってやるウ」

痩せこけた背中を丸め、よだれを垂らしながら迫ってきます。

フルートは汗を流しながら赤ん坊を抱き続けていました。金の石は聖なる光を放ち続けているのに、赤ん坊が重くてペンダントを外に引き出すことができないのです。この赤ん坊もやっぱり闇の仲間かもしれない、と考えて、思わず赤ん坊を投げだそうとします。

とたんに赤ん坊がひときわ大きく泣きました。とたんに、フルートは、はつとして、また赤ん坊を抱き直してしまいました。赤ん坊の声はまるで助けを求めているようだったのです。どれほど赤ん坊が重く

感じられても、懸命にそれを支えます。

赤ん坊の声をグールも聞きつけました。落ちくぼんだ眼窩の奥で、ぎよろつと目玉を動かして言います。

「あんなところに赤ん坊だア」

「いいな。赤ん坊は柔らかくてンまいぞオ」

「まずはあれからだこオ」

いつせいにフルートめがけて襲いかかってきます。

フルートはとっさに赤ん坊をかばいました。赤ん坊の重みで今にも

倒れそうになりながら、鎧を着た体でグールの攻撃を防ぎます。

「気をつける、フルート！ グールは毒を持つてるぞ！」

ゼンがどなりながら矢を放ってきました。狙ったものは絶対に外さない魔法の矢です。怪物とフルートが接近していても、怪物だけに突き刺さって、フルートや赤ん坊は傷つけません。

グールが悲鳴を上げ、すぐに矢を引き抜いて捨てました。闇の怪物は驚異的な回復力を持っているので、傷はみるみるふさがり、怒り狂ってゼンに飛びかかってくる。

とたんにザーツという音が湧き起こりました。砂浜の横の丘からゼンの目の前に、大量の花が降ってきたのです。生きた虫の群れのようにグールに襲いかかって、花の中に包み込んでしまします。

ゼンの横でメールが両手を高くかざしていました。

「花たち！ 怪物を突き刺しておやり！」

と手を振り下ろすと、花がいつせいに身震いして茎を伸ばし、怪物の絶叫が響きます。

ポチとルルは風の犬に変身しました。仲間たちの周りを飛んでつむじ風を起こし、グールの群れを吹き飛ばします。

砂の上に転がった怪物は、ふくらんだ腹が邪魔ですぐには立ち上がれません。キィキィと怒った声でわめき、枯れ枝のような手足を振り回してもがきます。

すると、ポポロがフルートに飛びつきました。赤ん坊を抱いたまま身動きできなくなっているフルートに代わって、首の鎖をつかんで引張り、鎧の胸当ての中からペンダントを引き出します。とたんに澄んだ光があたり一帯を照らしました。聖守護石と呼ばれる金の石が放つ光です。人や怪物や砂浜を金色に染めます。

金の石の力は絶大でした。グールたちが悲鳴を上げながら溶けていきます……。

砂浜から怪物が残らず消えました。金の石が聖なる光を収め、後にはフルートたちと、フルートの抱く赤ん坊だけが残ります。

ゼンがフルートに駆けつけました。

「いつたいたどうしたって言うんだよ！？ なんなんだ、この赤ん坊は！？」

赤ん坊はその頃にはもう耐え切れないほど重たくなくなっていました。怪物が消えれば赤ん坊も元に戻るのかと思ったのに、その様子もありません。脂汗を流して支え続けるフルートの腕に、ゼンが手をかけて、ぐつと引き上げます。

とたんに、赤ん坊が泣きやみました。黒い目で自分を抱くフルートをじつと見上げます。フルートたちも思わず赤ん坊に注目します。

すると、赤ん坊が、えーつと声を上げました。

フルートたちはいつそう驚きました。赤ん坊は目を細めて笑ったのです。

いきなり腕の中が軽くなって、フルートはよろめきました。赤ん坊が消えていました。もうどこにも見当たりません。

犬の姿に戻ったポチが、茫然としながら言いました。

「ワン、あの赤ちゃんは今、ありがとって言ったんですよ。そういう匂いがしました」

一同はますます驚きました。怪物も赤ん坊もいなくなった砂浜に、波と風の音だけが響いています。

すると、やはり犬に戻ったルルが、急に耳を動かしました。ワンワン、と砂浜の奥へ激しくほえ出します。

「そこにいるのは誰!? 出てらっしゃい!」

とたんに、大きな岩の後ろから声が始めました。

「み、見つかつちやつたよあ!」

「出ていったほうがいいよ」

「だって、あいつら変な恰好してるぞ」

「でも、あいつら、石ややこを助けたぞ。きっといいヤツらなんだよ」

いやに幼い声が話し合っています。フルートたちが思わず顔を見合わせていると、岩の後ろから声の主たちがぞろぞろと出てきました。

それは五人の子どもたちでした。男の子が三人、女の子が二人で、一番大きな子でもまだ十歳になっていないように見えます。丈の短いガウンのような服を着て、腰のところを紐でしばり、足は裸足か草を編んだサンダルばきという、奇妙な恰好をしています。

「君たちは誰? 石ややこって、あの赤ちゃんのことかい?」

とフルートは尋ねました。子どもたちがびよこん、とっせいにうなずきます。

「そつだよ」

「この砂浜に出てくる妖怪なんだ」

「人間が抱き上げるとどんどん重くなって、そのうち抱いていられなくなるんだ。でも、下におろしちゃうと、石ややこに取り殺されちゃうんだよ」

「石ややこを最後まで抱いてたのって、お兄さんが初めてだ。石ややこはもう出てこないよ。ずっと抱いていてもらって満足したから」

フルートは思わず首をかしげました。重さに耐えきれなくなって下ろすと取り殺される、というのは物騒な話ですが、なんだかいやに淋しい雰囲気の話です。ありがとう、と言って消えていった赤ん坊の笑顔を思い出します。

すると、足下からポチが口をはさんできました。

「ワン、今、妖怪って言いましたよね? それって、怪物のことですよね?」

犬が人のことばを話しているのに、子どもたちは驚きませんでした。口々に言います。

「妖怪は妖怪だよ」

「いい妖怪も悪い妖怪もいるよ」

「いろんなところにたくさんいるんだ」

「いろんな恰好もしているよ。君は犬の妖怪?」

ポチはフルートたちを振り向きました。

「ワン、ここがどこかわかりました。ユラサイですよ。ユラサイでは、怪物のことを妖怪と呼んでるんです」

と中央大陸の東にある国の名前を言います。

ところが、一番年上の子どもがそれを聞きつけて言いました。

「違わあ。ここはユラサイなんかじゃないよ。ここはヒムカシの国さ」
ヒムカシの国? とフルートたちは目を丸くしました。

3

ヒムカシの国と言われて、フルートたちは驚きました。今まで聞いて

たこともなかった国の名前です。

「じゃ、ここはどこにある国なの？ ユラサイは近いのかい？」

とフルートは尋ねましたが、まだ幼い子どもたちはそれに答えることができませんでした。しばらく困ってから、こう言いました。

「お兄さんたちをてんじいのところ連れてってやるよ」

「てんじいは、すごく物知りなんだ。てんじいならきつと答えられるよ」

と、砂浜の奥に見える山へ向かって歩き出します。フルートたちはあわててそれを追いかけてきました。てんじいというのが何者なのかわかりませんが、とにかく会ってみよう、と考えます。

砂浜はじきに終わって、急な山道が始まりました。道の両脇から木がおおいかぶさって緑のトンネルのようになった道を、子どもたちはどンドン登っていきます。その後をついていきながら、ルルがつぶやきました。

「変よ あの子たちが通った後の道に、人間の匂いがほとんどしないわ」

鼻の頭にしわを寄せています。ポチが聞きつけて驚きました。

「ワン、そういえば……。だけど、あの子たちから悪い匂いはしないけれど？」

「闇の匂いもしないわよ。でも、怪しいじゃないの。だいたい、あんな小さな子たちが山道をこんなに速く登っていけるって、どういうこと？ 山に慣れているゼンより速いのよ？」

それはその通りでした。ゼンもフルートたちも一生懸命山道を登っていましたが、それでも、先を行く子どもたちを見失わないようにするのがやっとだったのです。

「確かめてみるわね」

と言うなりルルは風の犬に変身しました。ごうっとうなりを上げて

前へ飛んでいき、子どもたちの前に降り立って激しくほえ出します。

ウォンオンオン……！！！！

子どもたちは立ちすくんで、いつせいに悲鳴を上げました。とたんに、その姿が変化しました。小さな子どもなのはそのままですが、頭がふくれあがるように大きくなります。足が一本溶けるように消えてしまった子もいます。

駆けつけたフルートたちは驚いて立ち止まりました。五人の子どもたちは皆、大きな頭に大きな一つ目の怪物に変わっていたのです。四人はきやあきやあと悲鳴を上げていますが、一番小さな子どもだけは何も言いませんでした。その顔には、口がありません。

「ワン、サイクロップスだ！！」

とポチは言いました。サイクロップスは一つ目の巨人です。次の瞬間には見上げるような大きさになるのではないかと、フルートたちは身構えました。

ところが、子どもたちはそれ以上変わることがありませんでした。抱き合ったまま悲鳴を上げ続けています。その大きな一つ目からは涙がこぼれていました。牙をむいてほえる風の犬を怖がっているのです。

「待て、みんな」

とフルートは仲間たちを制止しました。ゼンは魔法の弓矢を構え、メールは花を呼び寄せていたのです。ポチは低く身構えて風の犬に変身しようとしていました。一つ目の子どもたちは何もしてきません。ただ抱き合っていて泣いているだけです。

すると、頭上の梢が急に鳴って、何かが空から急降下してきました。背中に羽根を生やした人のような怪物です。手にした杖をフルートたちに突きつけてどなります。

「よくも山にやってきたな、不屈きな人間どもめ！！ 許さん

ぞ!!!」

われるような声と共に雷が降ってきました。とっさにフルートが仲間たちの前で両手を広げると、その胸で金の石が輝いて、雷を跳ね返します。激しい音をたてて稲妻が道ばたの木に落ちたので、一つ目の子どもたちがまた悲鳴を上げます。

「なんだよ、こいつらは!？」

ゼンがどなりながら前に飛び出してきました。次の瞬間には、空にいた怪物めがけて矢を放ちます。

翼の怪物が手にしていた羽根の団扇うちわを振りました。たちまち激しい風が巻き起こって、矢が押し返されます。

フルートは炎の剣を引き抜きました。怪物の魔法を跳ね返すために盾も構えながら呼びます。

「ポチ!」

「ワン!」

たちまち小犬が風の犬に変身しました。フルートを背中にすくい上げて、空の怪物へ飛んでいきます。巻き起こった風に木々の梢がごうごうと揺れます。

すると、怪物が言いました。

「これは珍しい。風の犬か! だが、ここはわしの山じゃ! おまえたちをここから生きて帰すわけにはいかんわ!」

ところが、その瞬間にまた悲鳴が上がりました。今度は一つ目の子どもたちだけでなく、ポポロの声も一緒です。

「木が倒れるわ!」

稲妻が命中した大木が、風にあおられてゆっくりとかしいでいました。太い幹が一つ目の子どもたちの上に倒れていきます。子どもたちは立ちすくんでしまって、その場から逃げることはできません。

「いかん!」

と翼の怪物がまたどくなりました。フルートとの戦いを投げ出して飛んでいきますが、木の倒れるほうが先でした。子どもたちが大木の下に消えていこうとします。

すると、フルートが叫びました。

「ゼン、ルル!」

おう、とゼンが木の下に駆け込みました。両手を上げて、倒れてくる幹をがっしりと受け止めます。そこへルルが飛び込んできました。長い風の体に一つ目の子どもたちを巻き込んで、木の下からさらっていきます。

「まったく。なんだって怪物を助けてやらなくちゃならねんだよ。こいつら、敵かもしれないわよ。だって、フルートは金の石の勇者なんだもの!」

ゼンとルルがばやきながら怪物の子どもたちを避難させます。

翼の怪物は空に浮いたまま、ぼかんとその様子を見ていました。ゼンが放り出した木が、ずしんと重たい音をたてて落ちたので、また驚きます。

空ではポチに乗ったフルートが、ほっとした顔をしていました。たとえ怪物でも、子どもたちが押しつぶされるところなど見たくはなかったのです。そんなフルートを、翼の怪物がふりむきました。金の鎧兜を着た姿をつくづくと見て言います。

「金の石の勇者と言ったな……。おまえのような子どもか? 本当なのか?」

驚く声に敵意は感じられません。

すると、ルルの風の体から解放された子どもたちが、空を見上げて呼びかけました。

「てんじい! てんじい!」

「あなたが?」

とフルートも驚きました。てんじいと呼ばれた怪物は白い服を着て、頭に小さな黒い帽子をかぶり、片手に杖を持っていました。さつき風を起こした羽根団扇は腰の帯から下がっています。赤い顔の真ん中に、異様に高く長い鼻があります。

すると、地上で花に囲まれていたメールが言いました。

「フルート！ その人、天狗てんぐっていうんだってさ！ この山の主で、危険な人じゃないって、花たちが言ってるよ！」

「天狗……」

フルートは改めて相手を見ました。今まで会ったこともなかった怪物です。

すると、翼の怪物が言いました。

「これはこれは。確かに金の石の勇者らしいな。不思議な仲間を連れておるわい。いかにも、わしは天狗じゃ。もうずいぶん長いこと、この山に住み着いておるが、実を言えば、こう見えてもエルフ族の末裔まごえじゃ。ようこそヒムカシの国へ、金の石の勇者。オシラの予言の通りだったな」

歓迎のことばを言っ、からからと笑つ天狗を、フルートたちはあっけにとられて見つめてしまいました。

4

「ヒムカシの国というのは、ユラサイの東側にある島国じゃ」

山奥の家で、天狗はフルートたちに食事を勧めながら、そんな話を始めました。

「大小の島々が集まってできている国で、ユラサイとは内海で隔てら

れておるが、昔からユラサイとのつながりは深い。いろいろなところで、ユラサイと似たものを見つけることができる。ことば、文字、法律、医学。こんな食事の中にもユラサイの影響はある」

「ワン。だから、この国でもユラサイと同じように怪物を妖怪と呼んでいたんですね」

とポチが言いました。相変わらず、とても賢い小犬です。

「ユラサイは近いんですか？」

とフルートは尋ねました。

「ぼくとポチは、以前、ユラサイの手前のシェンラン山脈まで行ったことがあるんです。魔王を倒してゼンを助けるために」

「では、金の石の勇者は、もう少して世界を一回りすることになるな」と天狗が笑いました。

「わしの翼でなら、ユラサイまで七日ほどで飛んでいける。風の犬たちならば、もっと早く行けるだろう。ここら、そんなにあわてて食うな。飯はなくなったりせんぞ」

後半は、フルートたちではなく、同じ部屋で食事をしている子どもたちに言ったことばでした。一つ目の子どもたちは、刻んだ野菜や魚が混ざった粥をむさぼるように食べていたのです。食べ終わるとすぐに自分で鍋からお代わりをして、また食べます。体は小さいのにかかなりの食欲です。

フルートはまた尋ねました。

「この子たちはなんていう怪物なんですか？ 一つ目だけれど、サイクロップスとは違うんですか？」

「無論違う。この子らは一つ目小僧たちじゃ。サイクロップスとはまったく別の生まれ方をしてきた妖怪よ」

と天狗が答えます。

一つ目小僧たちは賑やかでした。せわしく粥をかき込みながら、同時にしゃべり、笑い、口喧嘩をしています。なんだか人間の子どもの

ちを見ているようなので、フルートたちはいつの間にか彼らを気味が悪いと感じなくなっていました。

一番小さな子は、目が一つしかないだけでなく、その下に口もありませんでした。他の子たちは大口を開けて食事をしているのに、その子だけは静かに座って、にこにここと笑い続けています。

子どもたちと同じ粥をかき込みながら、ゼンが言いました。

「おい、天狗、この子は何も食わなくていいのかよ？ 口がなかったら食事ができないんじゃないかねえのか？」

「ああ。その子は何も食べん」

と天狗はあっさり答え、フルートたちの表情を見て、続けました。

「この子らは妖怪じゃ。本来、妖怪は何も飲み食いせんでも死にはせん。ただ、この子らは腹を減らしながら死んで妖怪に生まれてきたからな。食つ必要はなくても、やっぱり腹を減らしておるんじゃない」

フルートたちはさらにいぶかしい顔になりました。腹を減らしながら妖怪に生まれてきた？ とメールが聞き返します。

すると、天狗は口のない一つ目小僧に手招きをしました。やって来た子を膝に抱いて、静かに話し出します。

「この子らは、元は人間の子どもだったのよ。飢饉の年に親に山に捨てられて、そのまま飢えて死んでいったんじゃない。本当はもつと生きたかったという末練があるから、黄泉の門をくぐる事ができん。そのまま妖怪に生まれ変わってきたんじゃない。この子らの目玉が一つしかないのは、親に捨てられたときに、片目をつぶされたからじゃ。片足を折られた子もいる。それ、その一本足の子がそうじゃ。この口のない子は、寝ている間に濡らした紙で口と鼻をふさがれて、息が詰まって死んだ。間引き、と言っただがな」

フルートたちは本当に驚きました。あまりに凄惨な話に、何も言えなくなってしまう。

一つ目の子どもたちは賑やかに食事を続けています。おかずを取った取られたで、とつくみあいの喧嘩が始まります……。

天狗は、口のない子を膝にのせて、優しく頭を撫でていました。同じくらい優しい声で話し続けます。

「なんてひどい親たちだ、とおまえたちは思うだろうな。我が子にそんな残酷な真似をするなど、とんでもない、と。だが、このヒムカシの国は貧しい。特に、北部のこのあたりは、夏にもしばしば冬の木枯らしのように冷たい風が吹く。そうなれば秋に米が実らなくなつて、たちまち飢饉じゃ。米とは、そら、今おまえたちが食べている、その粥の元よ。ヒムカシの人間たちの主食じゃ。しかも、わずかしが実らない米を、役人たちが税金としてかき集めていく。食うものがなくなれば、家族全員が飢え死にするしかない。生き延びるために、人間たちは弱い子どもや必要のない子どもを、山へ捨てにいくんじゃ。子どもが親を追いかけて山を下りてこないように、子どもの目をつぶし、足を折つてな……。残された子どもに生き延びていく術はないから、じきに山の中で飢えて死ぬ。親たちのほうも、自分たちがしてかしたことを正しいとは思つたらんから、子どもを捨てた山を恐れて忌み嫌うようになる。そんな気持ちで山に宿つて、山は子どもらの魂を妖怪に変えていくのよ。飢饉がこの地を襲うたびに、行く先を見失つた子どもらの魂が、一つ目小僧になっていくんじゃない」

天狗の話に、ゼンとメールは青ざめた顔を見合わせました。ドワーフたちは地下で安定した暮らしを送っていますし、海もいつも豊かなので海の民は食料に困るようなことはありません。それほどすさまじい飢えと悲劇を、とても想像することはできません。天空の国に住むポポロやルルも同様でした。魔法使いの彼らは、天候さえ魔法で変えて、常に豊かな実りを得ているのです……。

ところが、ポチが少しの間考えてから言いました。

「ワン、ぼくやフルートが住んでるロムド国も、四、五十年前まではそんな感じだったんですよ。ロムドは元々荒れ地や山地が多かったから、王都の東側以外は、いつもすごく貧しかったんです。ちょっと天候不順が続くと、すぐ飢饉が起きたし、そうなる、やつぱり子どもたちが森に捨てられました。女や子どもが人買いに売られることも多かったです。今のロムド王は、そんな国民の様子に胸を痛めて、西部の大荒野の開拓事業を始めたんです。街道を整備して、水路を引いて。荒野に畑や牧場が広がっていったおかげで、ロムドでは飢え死にする人が出なくなつて、今みたいな豊かな国になつていったんです」

「おまえたちには実に賢い王がいるんだな」

と天狗が穏やかに笑いました。口のないうつ目小僧は、天狗の膝で眠つてしまつていました。それをまだ撫でながら話し続けます。

「人間ならば、それができる。だが、わたしにはそれは許されておらん。山に捨てられた子どもがどれほど泣いていても、天狗のわたしには助けやることができない。人間の世界の出来事は、人間だけにしか変えていけないからな。だからせめて、妖怪になつた子どもたちだけは助けてやりたいと思つたのよ。飢えている子どもたちには腹一杯食わせて、寒さを忘れられない子どもには暖かい服や布団を準備してやつてな。どれほど手を尽くしても、子どもは一つ目の妖怪のままじゃ。だが、初めは笑わない子どもたちも、ここに来ればじきに笑つようになるんじゃない」

他の四人の一つ目小僧たちは、食事を終えて遊び始めていました。一人が回す独楽に他の子どもたちが歓声を上げます。

それを見て、天狗がまた叱りました。

「こら、そんなところで独楽回しをするヤツがあるか！ 外でやらんか、外で！」

はい、と子どもたちは言つて、そろそろと家の外に出て行きました。一本足の男の子は、ぴょんぴょんと飛び跳ねるように歩いていきます。一つ目の女の子たちが何かをささやき合つて、楽しそうに笑います。

そんな子どもたちを見ながら、フルートは静かに言いました。

「ぼくたちには、死んで闇の民から人間に生まれ変わった友だちがいるんです……。その友だちが言っていました。自分たちが死んで生まれ変わつてくるのは、人生をやり直せつて言われているからだと思つて。あの子たちも、きつと同じですよ。人間だつたときに悲しい人生しか生きられなかつたから、あなたのところで、幸せな一生をやり直してるんだ」

それを聞いて、天狗はにっこりしました。

「ありがとう。そんなふうに言つてもらえると、わたしもこの子らも実に嬉しいな」

いかつい赤ら顔がとても優しくなります。

すると、ずっと黙つて考え込んでいたポポロが、おずおずと口を開きました。

「あの、天狗さん……あたしたち、海岸で、石ややこつていう赤ちゃんや、ものすごく痩せたグールと出会つてるんですけど……あれもやつぱりそんなふうに生まれてきた妖怪なんですか？」

「痩せたグール？ ああ、餓鬼どもだな。そうじゃ。石ややこは口減らしに捨てられた赤ん坊の妖怪だし、餓鬼は飢饉で飢え死にした大人の魂がなる。連中に出会つたのに無事だつたのか。さすがは金の石の勇者たちだな」

「餓鬼はフルートが金の石で消滅させたわよ。石ややこは、フルートが抱き続けていたら消えちゃつたの」

とルルが答えると、ほう、と天狗は言いました。

「石ややは喜んで消えていったらう。生まれてすぐに捨てられた赤ん坊だから、親から存分に抱かれた覚えがない。だから、自分を抱いてくれ、と泣いて訴えるし、下ろすと怒ってその人間を取り殺してしまう。だが、石ややこが満足するまで抱き続けてやると、石ややは喜んで黄泉の門へ旅立っていくんじゃ。……餓鬼のほうはもうちよつと性悪で残忍だからな。連中を救うには、連中を消滅させるしかない。金の石の勇者というのは、実に優しいものだな」

天狗はしきりに感心していましたが、フルートは何も言えませんでした。天狗の膝で眠り続ける子どもを眺めてしまいます。大きな一つ目を閉じた寝顔は、とても安らかです……。

その時、とんとん、と家の入り口の戸がたたかれました。

「客じゃ。わしは立ち上がれん。すまんが開けてもらえんか？」

と天狗に言われてゼンが戸を開けに行くと、外に大人の女の人が入っていました。黒髪を結い上げて、真っ白い服を着ています。

「おお、今、知らせに行かせようと思っていたところじゃ」

と天狗が言うと、女の人が答えました。

「今日、金の石の勇者が到着することは、とつと昔にわかっています。どうぞ、うちへおいでください」

とても綺麗な人ですが、なんだか不思議な雰囲気漂っています。

すると、天狗がフルートたちに言いました。

「これはオシラ。人間たちは生活の守り神と崇めておるが、やはりエルフ族の仲間じゃ。どれ、オシラの家へ行こう。オシラは予知能力があつて、おまえたちがこのヒムカシの国を救うだろう、とずっと以前から言っていたんじゃ」

自分たちがヒムカシの国を救う？

意外な話に、フルートたちは驚きました。

オシラの家は天狗の山の隣山にありました。風の犬で空を飛びながら、フルートは天狗と話し続けました。

「あなたたちはエルフの仲間なんですか？ ぼくたちはエルフとも会ったことがあるし、天空の民や海の民も、元を正せばエルフだったと聞いているんですが、こんなことを言っただけは失礼なのかもしれないけど、天狗さんはずいぶん姿が違うような気がします」

「これから向かうオシラの家にいる、もう一人のオシラもそうじゃ」と天狗が笑って答えました。気を悪くした様子はありません。

「わしはもう三百年以上この山に住んでいるが、住み着いたばかりの頃は、他のエルフと同様、普通の人のような姿をしておったよ。だが、さっきも話したように、人間たちは山を非常に恐れている。自分たちの罪の意識が山を恐ろしく見せているんだな。同時に、山はさまざま

な恵みも与えてくれるから、人間は山を敬つてもいい。その気持ちは山に宿つて、そこに住むわしらを変えていったんじゃ。山には恐ろしくも神々しい山神がいる、と人間たちが思つてるから、わしらもこんな姿になつたのよ」

天狗は赤い顔にぎよろりとした大きな目玉、異様に長い鼻をしています。翼を広げた体は大きくて、いかにも強そうです。

ゼンが眉をひそめました。

「人間の想いつてのは、そんなにも強烈なものなのかよ？ まるで魔法じゃねえか」

「まさしくその通りだな」

と天狗は答えました。

「まさしくその通りだな」

と天狗は答えました。

「まさしくその通りだな」

と天狗は答えました。

と天狗は答えました。

「この世界には魔法の力が宿っていて、人の想いが形になって表れやすい。想いはすぐに寄り集まって形をとるし、物に影響を与える。勇者が持つ金の石もそうじゃ。それは純粋な守りの想いが寄り集まって、石の形になったものだからな。一つ目小僧たちを生むのも、人の恐れ
の心じゃ」

「ったく。人間ってヤツはよ」

とゼンがぼやき続けると、天狗がまた笑いました。

「わしらはおまえたちドワーフも人間のうちに数えておるぞ。天空の民も海の民もノームも、わしらエルフだって、大きな目で見れば、やはり人間の仲間じゃ。ただ、わしらエルフは他の種族より魔力が強い。その分、理ことわりによって、この世に関わることを制限されているんじゃ。

……意味がわからんか？」

ゼンの顔を見て天狗が言いました。ゼンは鳩が豆鉄砲を食ったような表情をしていました。

「説明しねえでいい。後でフルートに聞くから」

無然としながらゼンが言います。

その時、一行の前を飛んでいた女性が、行く手の山中を指さしました。

「着きました。あそこです」

山の森の中に、ぼつんと小さな家が建っていました。女性が白い着物の袖と裾をひらめかせながら下りていきます。天狗やフルートたちは、その後についていきました。薄暗い森の中に降り立ちます。

女の人が家の戸をからりと戸を開けると、中に人が座っていました。全身白い服を着た男の人で、人の体の上に大きな白馬の頭が載っています。怪物のような異形ですが、フルートたちはとりたて驚くことなく頭を下げました。

「この二人がオシラじゃ」

と天狗が言いました。

「人間たちからは、生活を守る夫婦めおとの神と崇められておる」

「わしらは隠れ里のエルフだ。ただ少し魔法と占めいができるだけに過ぎん」

と馬頭の男がたしなめるように言ったので、天狗はうなずきました。

「無論、人間がそう思っている、というだけのことじゃ。だが、この勇者たちは、そんな人間たちとも違うぞ。まだ子どもだが、世界をずいぶん見聞してきている。こんな恐ろしげな天狗の話も、しっかり聞いてくれるわい」

「それはずいぶん前から、わしの占いにも出ていた。金の石の勇者たちは、わしらを、妖怪人間のへだてなく助けてくれるだろう、とな。さっそく海岸の連中が救われたようだな」

馬頭の男の前には、細い棒を何本も束ねたものや、切り抜いた紙のようなものが置かれていました。占いの道具です。それでフルートたちの様子を見ていたのに違いありませんでした。

フルートは言いました。

「ぼくたちはさつき、ここに到着したばかりで、ヒムカシの国のことを何も知りません。ただ、とても貧しくて悲しい人たちが大勢いるということことは聞きました。ぼくたちに、その人たちを助けることはできますか？」

フルートにとつて、国の違いなどは、まったく関係ありません。人であろうと動物であろうと、妖怪と呼ばれる怪物であろうと、そこに苦しんでいるものがあれば、助けてあげたい、と考えてしまうのです。理屈ではなく、心の底から湧き上がってくる強い想いでした。

そのまっすぐなまなざしを見て、馬頭のオシラは静かにうなずきました。

「もちろん救える。この国は今、二つの勢力に別れて戦乱の最中

なのだ。それぞれに帝^{みかど}をたて、こちらこそが正当な統治者だと言い張って、国中で戦を繰り広げている。直接戦場になった場所はもちろん焼け野原になるが、戦から遠く離れたこのあたりでも、男たちは兵として連れていかれるし、米は兵糧や戦の資金に根こそぎ持って行かれる。後に残るのは力の足りない女子どもと年寄りばかり、しかも、食い物もないとなれば、村人が飢えるのは当然のことなのだ。飢饉は天候によつて引き起こされるが、戦がそれを悪化させているのだ」

それを聞いて、メールが、もう！ と声を上げました。

「またそついつ話！？ どうして人間はすぐにそつやつて争うわけ！？ 戦いで国の連中がどれくらい酷い目に遭うか、考えたことないのかい！？」

クーン、とポチが鼻を鳴らしました。

「他人が自分たちのために尽くすのは当然と考えている権力者は多いですからね。そういう人たちは、人々の気持ちなんか考えないし、自分が誰かの下になるのにも我慢できないんだ」

「つたく。いい加減にしゃがれ！」

吐き出すようにゼンも言います。

すると、馬頭のおシラは目の前から細い棒の束を取り上げました。それを手の中で鳴らしながら話し続けます。

「問題はそれだけではない。戦はもう本当に長い間続いているのだが、そこへ最近になって、新しい力が加わるようになったのだ。何が負担しているのか、それはわしの占いでわからん。だが、南の方の妖怪たちが正気を失って、人間の戦いに加わるようになった、と向こうの仲間たちが伝えてきている。このままではますます戦が広がり、やがてこのあたりも戦場になるだろう。そうなれば、多くの田畑や村が焼かれ、飢饉の時よりもっと大勢の人間が死ぬことになる……。わしらエルフは人間の生き様には直接は関わらん。だが、わしらを山神と思つて崇める人間の声は、わしらの耳に届く。これ以上、人間たちを悲し

い目に遭わせたくない、わしらも天狗も、どうしても思つてしまうのだ」

おシラの話に、フルートはためらうことなくうなずきました。

「わかりました。すぐに南へ向かいます。そして、全力で戦いを止めます」

すると、メールがまた言いました。

「怪しいよね、その、戦いに荷担してる新しい力つてヤツ。戦争をおつて大きくするなんて、闇の力みたいじゃないさ」

「ワン、時期から考えれば充分ありえますよね」

「あいつつたら、こんなところへ逃げてきていたわけね」

と二匹の犬たちも口々に言ったので、天狗は目を丸くしました。

「おまえたちは力の正体に心当たりがあるのか？」

ゼンがそれにならず返しました。

「ありすぎだぜ。きつとそいつはデビルドラゴンだ！」

デビルドラゴン！ と馬頭のおシラは驚きました。

「世界を滅ぼす闇の竜だな。そんな奴がこのヒムカシの国にやってきていたのか？ わしの占いにはまったく現れていなかったのだが」

「おシラさんが光の一族だからだと思えます……。光の魔力の占いには、闇は姿をあらわさないんです」

とポポロが説明しました。引つ込み思案のポポロですが、こういう話には口を出します。

ふうむ、と天狗がうなりました。顎ひげを撫でながらおシラに言います。

「なんとも容易ならんことだな。デビルドラゴンが関わっている、とても太刀打ちできんだろう。いくら金の石の勇者といつても、たった四人と二匹じゃ。しかも全員子どもだぞ」

「彼らにできなければ、他の誰にも戦は止められない、と占いには出

ている」

と馬頭のエルフが答えます。

「止めてみせます」

とフルートは繰り返しました。何ものにも動かされない、あの強い口調になっていました。

「デビルドラゴンがそこにいようと、何がしようと、それでみんなが飢えなくなつて、子どもたちが山に捨てられなくなるなら、ぼくらは全力で戦争を止めてみせます」

山の中を風が吹き抜けて、小さな家を揺らしていきました。ガタガタと鳴る戸の向こうで、風の音が子どももの泣き声のように響いています……。

天狗が大きくうなずきました。

「わかった。では、わしがおまえたちを戦の起きている場所まで案内してやるう」

馬頭のオシラのほうは、すまなそうに頭を下げました。

「わしらはここを離れることができません。わしらは人間たちから暮らしの守り神と信じられているから、その想いに困われて、この地から動けないのだ。代わりに、天狗の留守中、一つ目小僧たちの面倒をみていてやるう。安心して行ってくるがいい」

「おお、恩に着る」

と天狗が嬉しそうに言います。

すると、それまで黙っていた女のオシラが、すっと立ち上がり、隣の部屋から何かを持ってきました。美しい薄絹の布です。それをポポロに渡して言います。

「これは私が織つたもの……。エルフの魔法の技で作り上げた肩掛けよ。あなたならば、これの使い方がわかるでしょう？ 持って行きなさい」

ポポロは驚いて女の人を見上げました。その手の中で白い長い布がきらきらと輝いています。日の光を折り込んだような、美しい布です。「家内は機織りの名人なのだ。おまえたちが来るときに合わせて、それを作っていた。きつと役に立つだろう」

と馬頭のオシラも言います。ポポロは素直に肩掛けを受けとりました。ふわりと柔らかい手応えで、まるで空気を抱いているような軽さです。

ところが、メールは女のオシラのほうを見ていました。

「ねえさあ、旦那さんは馬の怪物みたいな姿になつてくせに、どうして奥さんはそんなに綺麗なの？ それとも、奥さんも本当は怪物みたいな恰好になつてて、人の姿に変身してるだけなのかい？」

いつものことですが、怖いほど単刀直入に尋ねるメールです。天狗が苦笑いしました。

「いいや、姫神は元の姿のままじゃ。馬神が人間たちの想いを一手に引き受けとるからな。その分、馬神はわしらより醜く姿が変わってしまった」

「女房が怪物になつて嬉しい男はおらん。それだけのことだ」

とオシラが答えました。馬の頭の怪物の姿でも、その声は低く穏やかです。

フルートは仲間たちへ黙つてうなずき、仲間たちもいっせいにうなずき返しました。人間たちから勝手に恐れられ崇められ、異形の姿に変えられても、それでも人間たちを心配する優しいエルフたち。彼らのためにも必ず戦いを止めよう、と彼らは心に誓ったのです。

戦いは南北に長いヒムカシの国の、中央付近で起きていました。山の裾野に無数の矢が飛び交い、馬に乗った大勢の兵士が激しく戦い合っています。戦場は怒声と蹄の音でいっぱいです。

「変わった防具だな」

とゼンが風の犬のルルの上から目を丸くして見ていました。ヒムカシの兵士たちが着ている鎧兜は、彼らが見慣れている防具とはずいぶん形が違っていたのです。小さな板をつづり合わせたような鎧と、飾りのついた三角形の兜です。

「気をつけなよ。連中、矢を使ってるから、気がつかれたら、こっちが攻撃されるよ」

とメルが花鳥の上から言うと、自分の翼で空を飛んでいた天狗が言いました。

「今はまだ大丈夫じゃ。わしが神通力でこちらを隠しているからな。これはヒムカシを北と南に分けた戦いじゃ。それぞれ自分たちの帝を立てて、こちらが正式な統治者だ、と言いついておる。妖怪どもが力を貸しているのは、南軍のほうじゃ。そのせいで、戦はどんどん北にやってきている」

その北に天狗やオシラたちが住む山があります。戦場が北へ来れば、山の麓の村々が焼かれて、人間たちが大勢死ぬことになるのです。

フルートが言いました。

「北も南も関係ないよ。とにかくこの戦いをやめさせなくちゃ。」

デビルドラゴンは着実に力をつけてきている。金の石の光にダメージを受けても、すぐにまた世界に姿を現すのが、その証拠だ。あいつは人の憎み合う気持ちから力を得るから、戦いがひどくなればなるほど、あいつも強くなってしまうんだ」

「ワン、どうしますか？」

とフルートの下からポチが尋ねました。変身して空を飛んでいるの

で、周囲でごうごうと風の音が鳴り響きます。フルートは考え込みました。

「たとえばポポロの魔法で彼らをおどかして、この戦闘をやめさせることはできる。だけど、それですべての戦いが終わるわけじゃない。なんとかして、両軍に争いをやめさせなくちゃいけないんだけど」

戦場では人と馬が入り乱れて激しく戦っていました。細長い剣がひらめくたびに血しぶきが飛び、切られた兵士が落馬します。矢を受けた馬がいなくなきながら倒れ、乗っていた兵士が投げ出されます。国が違い、兵士たちの姿が違っていても、戦いのありさまは少しも変わりません。血と怒りと苦しみがあふれかえり、地面には死体が増えていくのです。

また一人、眼下で兵士が切られました。馬から落ちた兵士を、他の兵士の馬たちが踏みつぶします。空まで響いてきた絶叫に、フルートが苦しげに顔を歪めます。

すると、メールの花鳥の上から、ポポロが声を上げました。

「来たわ！ あれー！」

戦場の南の方角から、新たな一軍がやってきていました。鎧兜の兵士たちではありません。奇妙な姿をした怪物たちの集団です。ある者は地を走り、ある者は空を飛び、ほえるような声を上げながら突進してきます。

とたんに戦場の様子が一変しました。兵士の半数は驚いて浮き足立ち、残りの半数は歓声を上げて勢いを増したのです。北へ退却を始めた兵を、南の軍勢が追いかけて討ち取ります。そこへ怪物の集団がなだれ込んできました。南軍の間をすりぬけて北軍に襲いかかります。

「南の妖怪たちじゃ」

と天狗が眉をひそめて言いました。

「鬼、キツネ、こまいぬ 狢犬、ねだまた 猫又……九頭竜くずりゅうまでおるな。皆、こんな戦に手を貸すような連中ではない。何者かに操られているようじゃ」

「ポポロ」

とフルートが振り向いたので、ポポロはうなずきました。魔法使いの目で、妖怪たちを操る者を探し始め、じきに戦場の南側の丘を指さしました。

「あそこ……すごく強力な魔法を使ってる人がいるわ。きっとあの人よ」

「よし」

フルートたちは南の丘目ざして飛び始めました。丘の上に張り巡らされた幕と、寄り集まる人々が見えてきます。ひとときわ立派な鎧兜を身につけた戦士が、椅子に座って戦場を眺め、手にした扇を向けては何かを命じていました。南軍の将軍に違いありません。

そのかたわらには、また別に、白い幕を張り巡らせた小さな祭壇があつて、一人の男が背中を丸めて祈っていました。祭壇の上空に巨大なヒキガエルが現れて、ひと飛びで丘から戦場へ飛び込んでいきます。

「祈禱師だな。妖怪たちを呼びだしてやる」

と天狗が言いました。

フルートは胸の上にペンダントを引き出していました。魔石は金に輝くだけで、明滅はしていません。

「あの妖怪たちは闇の怪物にはなっていない。祈禱師を止めれば妖怪たちも正気に返るはずだ。行くぞ！」

おう、と仲間たちが答え、いつそう速く空を飛んでいきます。

すると、突然白い幕屋から男が振り向きましました。白い髪にまばらなひげの老人です。フルートたちの姿は天狗の魔法で隠されているはずなのに、ぎよろりと空をにらみつけて叫びます。

「わしらの邪魔をするのは何者だ！ いね！」

とたんに空に黒雲が湧き起こって雷鳴が響きました。稲妻がフルートたちに向かつて落ちてきます。

けれども、それより早く金の光が広がりました。フルートたちを包んで雷から守ります。

驚いて頭上を見た人々が騒ぎ出しました。空にいるフルートたちを指さしています。雷撃に天狗の魔法が打ち消されて、フルートたちの姿が見えるようになったのです。

将軍がどなるように尋ねていました。

「あれはなんだ！？ 北軍も妖怪を使い始めたのか！？」

「そんなはずはありません！ ええい、これでも食らえ！」

祈禱師の声と共に、祭壇から大きな毒虫が現れました。空へ昇ってフルートたちに襲いかかってきます。

「へっ、小せえな！ ドワーフの洞窟のグラージゾの方が何倍もかいぜ！」

とゼンが笑って弓を射ました。白い矢が毒虫の頭を貫いて、虫が地上に落ちていきます。

そこへ戦場から妖怪たちが引き返してきました。角を生やした大男、竜や獣の姿の怪物たちです。

フルートはゼンや天狗と一緒に飛び出してきました。怪物を防ぎながら、メールとポポロに言います。

「祈禱師の祭壇を壊すんだ！ そうすればもう妖怪は呼び出せない！」

「あいよ！」

「わかったわ！」

少女たちが花鳥で丘へ急降下していきます。

今度はその目の前に黒雲が湧き起こりました。気味の悪い声が響き渡ったと思うと、雲の中から大きな生き物が飛び出してきました。頭が猿、体と足が虎、尻尾が蛇の怪物です。

祈禱師が叫びました。

「行け、鶴！ その者どもを食い殺すのだ！」

けれども、鶴が来るより早く、メールが言いました。

「花たち！」

ざーっと雨の降るような音と共に花鳥が崩れました。メールとポポロを乗せたまま一回り小さくなり、鳥から離れた花たちが鶴に飛びかかっていきます。怪物が全身を花の網に縛られて、空から落ちていきます。

ポポロが地上へ手を向けました。魔法で祭壇を打ち砕こうとします。

すると、祈祷師が立ち上がって叫びました。

「式神！ 出でよ、式神！！」

上空に白い霧が集まり、形になっていきます。青い長い上着の腰に帯を締め、白いズボンのようなものはき、黒い細長い帽子をかぶった男です。大きな白い扇子で顔を隠しています。

「妖怪変化を率いて戦え、式神！ その者どもを残らず倒すのだ！」
祈祷師に言われて、式神が扇子の陰からゆっくりと顔を上げます。

とたんに、式神が言いました。

「あれれれえ！ どおしてキミたちがここにいるのさ、勇者くんたちい！？」

メールとポポロだけでなく、フルートとゼン、ポチとルルまでが驚いて式神を振り向きました。それは、あまりにも彼らにお馴染みの声だったのです。

「ランジュール！！？」

と彼らはいっせいに叫びました。

祈祷師に呼び出されてきた式神はランジュールでした。フルートたちの命を狙ってつきまとっている幽霊です。異国の服を着た体は半ば透き通っています。

ゼンが拳を振り回してわめきました。

「この、ランジュール！ おまえこそなんでここにいるんだよ！？」

何だ、その恰好は！？」

「これえ？ ヒムカシの国の貴族の恰好だよ。ステキだと思わない？
うふふ……」

まるで女のような笑い方も、少しも変わりません。

「ボク、今は式神になってるんだよねえ。式神って知ってる？ 祈祷師に呼び出されて命令通りに行動する幽霊や怪物のことだよ。ボクもこの祈祷師に呼び出されちゃってさあ、しばらく前からヒムカシの国で働いてるってわけ。でも、この祈祷師ったら、霊使いが荒いから、忙しくてしょうがないんだよねえ」

南軍に力を貸していたのはこの祈祷師とランジュールだ、とフルートは気がつきました。ランジュールは非常に強力な魔獣使いです。呼び出した妖怪たちを操って、戦のために働かせていたのに違いありません。

とはいえ、ランジュールがおとなく祈祷師の命令に従っているというのには腑に落ちませんでした。一筋縄でいくような奴ではないのですが……。

ゼンも同じことを考えていました。

「祈祷師に働かされてるだあ！？ 冗談ぬかせ！ おまえがそんな玉なもんか！ いったい何を企んでやがる！？」

ランジュールはそれには答えませんでした。また、うふふふ……と笑います。

攻撃のために呼び出した式神が、敵とのんびりおしゃべりしているので、祈祷師が顔を真っ赤にしてどなりました。

「早くそいつらを倒せ！ わしに消滅させられたいのか！？」

とたんに、ランジュールではなく、フルートたちと戦っている怪物たちがすくみあがりました。次の瞬間には前より激しく襲いかかっていきます。

うぶん、と幽霊の青年は笑いしました。

「無駄だよ。このくらの妖怪で倒せるわけないって。こう見えたって、金の石の勇者の一行なんだからさあ」

叱られた本人はまるで平気な顔です。

狂ったようにかみついてきた九尾のキツネを、フルートは炎の剣で防ぎました。つかみかかってきた鬼を、ゼンが捉まえて空から投げ落とします。天狗は腰の羽根団扇であおぎ、猛烈な風で他の妖怪を押し返します。妖怪たちは、地面に落ちると姿が見えなくなってしまう。

「早く倒せ！ 早く！！」

祈祷師がわめき続けるので、ランジュールは肩をすくめました。

「ホントしょうがないなあ、このおじいちゃん。召喚する力は強いけれど、それをちつとも使いこなせてないんだからさ。もう雑魚しか残ってないじゃないか。これで勇者くんたちを倒せるわけないね。もつと強い怪物を出しなよ」

「ええい、式神の分際で偉そうに！」

歯ぎしりしながらも、祈祷師はまた祭壇へ念じました。とたんに、見上げるような男が戦場に現れます。異様に長い手足をした一つ目の巨人です。ダイダラ坊だ！ ダイダラ坊が出たぞ！ と戦場の兵士たちが口々に騒ぎ出しました。

「ダイダラ坊だあ？ だが、あれは」

「ワン、テナガアシナガだ！」

とゼンとポチが言いました。仮面の盗賊団の戦いの時に戦ったことがある怪物だったのです。あの時の怪物よりずっと小柄ですが、手足の長い姿はまったく同じです。

すると、ランジュールがまた笑いしました。

「うぶん、どっちも同じものだよ。場所によってダイダラ坊って呼ばれたり、テナガアシナガって呼ばれたりするのさ。ついでに言うとな、ボクらの国でサイクロップスとかギガスなんて呼ばれているのも同じ仲間だよ。大昔にこの世界を支配してた巨人族の、末裔の末裔さあ。」

うん、これならまあいいかなあ。勇者くんたちと戦えそうだ」

空中で白い扇を広げて、舞うように巨人へ動かしします。

「そあら、行くよ、ダイちゃん！ 勇者くんたちを追いかけて、虫みたいにつぶしちゃいな！ うぶんぶんぶん……」

楽しそうなランジュールの笑い声が響きます。

ダイダラ坊がポチを追ってきました。壁のような両手が勢いよく飛んできて、バチン、と宙をたたきます。ポチはその前に手の間をすり抜けましたが、激しい衝撃に風の尾が一瞬ちぎれました。湧き起こった風にあおられて、フルートが危なく転落しそうになります。

ダイダラ坊の足下では騒ぎが起きていました。怪物がフルートたちの後を追って、戦場に飛び込んできたからです。馬に乗った兵士たちが、南軍も北軍も関係なく、大きな足に踏みつぶされていきます。

南軍の将軍が祈祷師にどなりました。

「馬鹿者、何をしているか！？ 早く怪物を引け！！」

祈祷師は顔を真っ赤にしながらランジュールに言いました。

「やめませんか、愚か者！ あんなちびどもに何故そんなに手こずるのだ！？ さつさと捕まえて殺さんか！」

とたんにランジュールはきらっと目を光らせました。細い目を糸の

ように細くして、笑顔で答えます。

「好き勝手言ってくれちゃってえ。金の石の勇者たちが、そんなに簡単に倒せるわけないだろ。ちよっと痛い思いをするくらい、我慢してほしいなあ。」

口調はのんびりしたままですが、その陰にひどく剣呑なものが見え隠れていました。ダイダラ坊が風の犬を追って南軍の主力の中へ飛び込みます。さらに今度は北軍の主力が固まっている場所へ。ダイダラ坊の進む先々では悲鳴が上がり、つぶされた馬と人の血で大地が染まります。

「やめろ！」

とフルートは叫びました。怒りに真つ青になって震えています。それを見てランジュールがまた笑います。

「相変わらず優しいねえ、勇者くんは。関係ない人間でも、目の前で殺されるのは嫌なんだからさあ。ダイダラ坊に捕まりなよ、勇者くん。そうすれば、巨人は止まるよ。うふふ」

ダイダラ坊はフルートの後を追いつけます。一歩がとても大きいので、風の犬のポチでも、その手をかわすのがやっとです。足下でたくさんの人と馬が蹴散らされます。

「やめろ　　！！！」

とフルートはまた叫び、振り向きざま炎の弾を撃ち出しました。巨人がひよいとそれをかわします。フルートは唇をかみ、今度はペンダントを首から外して突きつけました。

「光れ！」

ダイダラ坊は闇の怪物ではないので、聖なる光で倒すことはできません。ただとにかく目をくらませて、足止めしようとしたのです。金の石がまぶしく輝きます。

とたんに、ランジュールの声が響きました。

「そうしてくれるのを待ってたよお！　そあら、ニヤーちゃん、それを食べちゃってえ！」

巨大な化け猫がフルートに襲いかかってきました。尾が途中で二又に別れている猫又です。鋭い牙をひらめかせたと思うと、フルートの手からペンダントを奪い取り、そのまま呑み込んでしまいます。

「金の石！！！」

フルートとポチは驚いて叫びました。聖なる魔石はペンダントごと怪物に食われてしまったのです。闇の怪物ではないので、魔石も脱出してくることができません。

ランジュールは上機嫌でした。

「勇者の一行を倒すには、金の石を使えなくすること　　新しくボクが考え出した勇者攻略法だよお、うふふ」

茫然とするフルートたちにダイダラ坊が迫っていました。壁のような手がポチとフルートをたたきつぶそうとします。

そこへ風の犬のルルに乗ったゼンが飛び込んできました。フルートに飛びついて突き飛ばします。

「馬鹿野郎！　早く逃げろ！」

フルートとポチが押し出されると同時に、ダイダラ坊の手が打ち合わされました。バチン、と大きな音をたてた両手の間に、ルルとゼンが消えていきます。

「ゼン！！　ルル　　！！！」

フルートとポチが思わず叫ぶと、手の隙間からルルが脱出してきました。風の犬なので怪我はありませんが、その背中にゼンは乗っていません。フルートが青ざめます。

ダイダラ坊が立ち止まりました。合わせた自分の両手を見つめます。その間に足下から兵士たちが逃げていきました。馬に乗った者は馬に鞭を入れ、徒歩の者は全力で走って、巨人から離れようとしています。

「どうしたのぉ、ダイちゃん？ ゼンを殺したら、次は勇者くんの番だよ」

とランジュールが声をかけました。立ち止まったまま動かないダイダラ坊を不思議に思ったのです。巨人は自分の手を見つめたままです。すると、その手が急に震え出しました。太い腕に筋肉が盛り上がり、腕と肩、背中までが震え始めます。巨人が合わせた手に力を込めているのです。何かを抑え込もうとしているようです。

それを押し返すように、じりつと怪物の両手が外へ動ききました。手と手の間にわずかに隙間ができます。そこから声が聞こえてきました。「へっ、でくの坊め。俺をつぶそうだななんて、百万年早いぞ！ さっさと放しやがれ！」

ゼンです。両手両足を突っ張って、ダイダラ坊の手を押し返しています。あああ、とランジュールが声を上げました。

「ちよつとお、ドワーフくん！ ホントに、どおしてキミそんなに力があるわけえ！？ いくらなんでも反則だったら！ もうちよつと常識つてのを考えてよお！」

「るせえ！ てめえこそ、死んで幽霊になつたくせに、生きてる人間より元気にフルートを狙うんじゃないやねえや！ 常識つてのを考えて、さっさと黄泉の門をくぐりやがれ！」

「やあだよ。ボクはやることはきつちりやりとげていくのさ。勇者くんと皇太子くんを殺して魂を手に入れるまでは、ぜえつたいに死者の国には行かないもんねえ」

ダイダラ坊の手の中と空中で言い合いをする二人を、ダイダラ坊や周囲の人々がぼかんと眺めます。

すると、フルートが突然振り向きましました。空で羽ばたく花鳥へ叫びます。

「今だ！ やれ、ポポロ！」

魔法使いの少女は鳥の背中からダイダラ坊を見つめていました。フルートに言われてうなずき、さつと手を向けます。

「ローデローデリナミカローデ……テウオウボラダイダ！」

とたんに上空に巨大な暗雲が広がり、稲妻がダイダラ坊へ落ちていきましました。

8

どどどーん……と激しい音が響き渡りました。

ポポロが魔法で繰り出した稲妻が、ダイダラ坊を直撃したのです。まばゆい光が巨人を呑み込み、地面を激しくたたきます。振動に人々は倒れ、頭を抱え込みます。

「ポポロ！」

とルルが驚いて飛んできました。花鳥の上から手を伸ばしている少女をどなりつけます。

「なんてことするのよ！ ダイダラ坊の手にはゼンがまだいたのよ！！！」

ゼンも巨人と一緒に雷の直撃を食らってしまったのです。ポポロが青くなると、すぐにメールが言いました。

「大丈夫、あいつは心配ないよ。だって、ほら」

稲妻が消えた後にダイダラ坊が現れました。全身を巨大な雷に打たれて、真っ黒に焼け焦げています。そのまま崩れるように倒れていくと、両手が離れて、中からゼンが飛び出してきました。青い胸当てをつけた体は、火傷一つ負っていません。

「あれはポポロの魔法の雷だからさ、ゼンの防具が防ぐんだよね」

とメルは言つて、ゼンを見守り続けました。落ちていくゼンに、ポチとフルートが駆けつけてすくい上げます。

「あーあ。ダイダラ坊がやられちゃった」

とランジュールが言いました。異国の貴族の恰好で、ひらひらと扇子を振っています。

「祈祷師のおじいちゃん、次の怪物を出しなよあ。このままじゃ、勇者くんたちに勝てないよあ？」

祈祷師は歯ぎしりをすると、また祭壇へ念じ始めました。

フルートはルルに言いました。

「風の刃であの猫を切ってくれ　！　金の石を取り戻すんだ！」

「わかったわ！」

ルルが猫又に向かって飛びました。風の体をひらめかせると、猫の胴体が真つ二つになって、中から金のペンダントが出てきます。地上へ落ちていくところを、天狗が追いついて拾い上げます。

すると、いきなり天狗の隣に二人の人物が現れました。赤い髪とドレスの女性と、黄金の髪と瞳の小さな少年です。

「無様だな、守護の。あんな怪物に食われて出られなくなるとは」

と女性が冷ややかに言うと、少年はむっとして言い返しました。

「余計なお世話だ、願いの。猫又は闇の怪物じゃない。ぼくの聖なる光では倒せないんだ」

「相変わらず非力なことだ」

「なんだと!？」

二人が空中で口喧嘩を始めたので、天狗が驚いていると、フルートとゼンがポチに乗って駆けつけてきました。

「金の石の精霊と　ぼくの中の願いの石の精霊です」

「すぐ喧嘩するんだけどな、けっこう息のあった二人なんだぜ」
とたんに二人の精霊がにらみつけてきました。

「馬鹿なことを」

「冗談じゃない！」

異口同音に言つて、姿を消していきます。フルートは苦笑すると、天狗から受けとつたペンダントをまた首にかけました。

すると、花鳥に乗った少女たちが声を上げました。

「フルート！　ゼン！　見なよ、あれ！」

「祈祷師がまた新しい怪物を呼び出したわ……！」

祭壇の上空に霧もやのようなものが寄り集まって怪物に変わりました。全長が百メートル以上もある大蛇です。太い胴体から八つの頭と尾が生えていて、牙をむいてシャアーツと鳴きます。その大きな体に青空が隠れて、あたりが薄暗くなります。

「ヤマタノオロチじゃ……！」

と天狗が叫びました。

「ヒムカシの国最大の蛇じゃ！　こんなもの、とても相手にはできません！」

「どんなにでかくても倒すしかねえだろうが！　こんなヤツが戦いに加わつたら、とんでもねえんだぞ！」

とゼンがどなり、飛んできたルルに飛び移りました。フルートと一緒に乗っているのは、重くてポチが速く飛べないからです。背中から弓を下ろして矢をつがえます。フルートは炎の剣を抜いていました。家をひと呑みにするほど大きな蛇へ、恐れる様子もなく迫って剣を振り上げます。矢と炎の弾が大蛇めがけて飛んでいこうとします。

ところが、ランジュールが急に言いました。

「はあい、ちよつと待って、はっちゃん。勇者くんたちを攻撃しないでいいよあ」

勝手につけた名前で呼ぶと、たちまちヤマタノオロチが身を引きま

した。狙いのはずれた矢と炎が空中を飛んでいきます。

「な 何をいつたい !? 早く倒さんか!」

地上で祈禱師が怒り狂いました。祭壇の前で足を踏み鳴らし、空へ手を振り回しますが、それを無視して、ランジュールは言い続けました。

「よおしよおし、いい子だねえ、はっちゃん……。ボクはこのくらい大きくて強い魔獣をずっと探していたんだよ。うふふ、出会えて良かった。あのつるさいおじいちゃんの下で我慢してた甲斐があったよねえ」

にこにこしながら大蛇の頭を一つずつ撫でていきます。

フルートはようやくランジュールの真意に気がつきました。

「そうか おまえが式神なんかやっていたのは、祈禱師に強い怪物を呼び出させるためだったんだな!? それを横取りして、自分のものにするつもりだったんだ!」

「うふふ。大当たりい」

ランジュールは上機嫌でした。

「このヒムカシは、ロダが昔、管狐くだきつねを捕まえた国だよ。小さな島国だけど、けっこう強い魔獣が多い場所だねえ。皇太子くんの未来の奥さんが管狐を使ってるのを見て、ここを思い出したってわけ。自分で魔獣を探し出すのは面倒くさいから、祈禱師のおじいちゃんに呼んでもらってたんだよ。ホント、待った甲斐があったなあ。これでようやく、キミたちを倒すことができるよお」

ランジュールの細い目が鋭く光り続けていました。顔は笑っていても、目は少しも笑っていません。冷やかに、残酷に、フルートたちを見据えています。その後ろでは空をおおう大蛇が鎌首をもたげています。攻撃の姿勢です。

フルートとゼンは空で身構えました。その隣に天狗も飛んできませんでした。それぞれに武器や杖を構え直します。

ランジュールが高く笑いながら言いました。

「さあ、はっちゃん! あそこにいるのが金の石の勇者くんだよ! ボクの愛しい仇敵さ! キミが食い殺す相手だよ! それじゃあ

退却う!」

ランジュールが突然大蛇を後退させ始めたので、身構えていたフルートたちは肩すかしをくらいました。ゼンなど、空中でつんのめって、危なくルルから転げ落ちそうになります。

「なに !?」

「やらねえのかよ! なんで退却なんだ!?!」

「だって、はっちゃんは今、ボクのペットになっただけだからねえ。もうちよつと訓練してからでなくちゃ、実戦には使えないよお。だから、今は退却。でも、近いうちに、はっちゃんと一緒に勇者くんや皇太子くんを倒しに行くよ。楽しみに待っててねえ。うふ、うふふ」

楽しそうな笑い声と共に、ランジュールは姿を消していきました。続けて、ヤマタノオロチも消えていきます。空をおおっていた蛇がいなくなつて、あたりがまた明るくなります。

戦場の人々は呆気にとられて上を見ていました。両軍の将軍も、それぞれの陣営から空を見上げます。どこを探しても、八つ頭の大蛇は見当たりません。怪物も一匹も残っていません。誰もが、夢でも見えていたように立ちつくしています。

ところが、その片隅で、低く何かを唱え出した人物がいました。祈禱師の老人です。祭壇の前に背中を丸めてうづくまり、しきりに念じます。

「いでよ いでよ この世でもっとも強くて大きな妖怪よ、早ういでよ。式神などにはもう頼らん。わしがおまえを指図して、この世のすべてを討ち滅ぼしてくれるわい」

祈祷師はずつと南軍の王室に仕えていました。国一番の祈祷師、かなう者のない妖怪使いと誉めそやされてきたのに、この戦闘ではとてもない失態ばかりです。おまけに、わけのわからない式神からは、さんざん馬鹿にされ、こけにされました。怒り狂った祈祷師は、この世で最強の妖怪を呼び出そうと、これまでやったことがなかったほど強く深く念じていました。

すると、突然丘の上に風が吹き出しました。祭壇の白い幕をちぎれそうなほどはためかせ、張り巡らせた幕や旗印を飛ばし、座っていた將軍や共の者たちを吹き倒します。そのまま祭壇を中心に広がっていつて、やがて戦場中を風の渦に巻き込みます。

激しい砂埃に目を細めて顔をそむけた兵士たちは、風が次第に様子を変えていくのに気がつきました。ただの空気の流れのはずなのに、次第にどす黒く染まっていくのです。オオオオオ……と獣のほえるような声が響き渡ります。

不安にかられた兵士たちはまた空を見ました。何かが現れようとしていました。とてつもなく巨大な気配が、空に広がっていきます。

勇者の一行は青ざめていました。フルートの胸の上で金の石が強く弱く輝いています。闇の敵が現れようとしているのです。

「おい、やべえぞ、フルート！ こいつは」

「ものすごい闇の気配よ！ こんな気配をさせるのって……！」

ゼンやフルートが口々に言いますが、最後まで言い終えることができません。風が猛烈に吹き荒れていて、まともに話すことができないのです。ついに、花鳥も風に吹き散らされて、ばらばらになりました。乗っていた少女たちが空に放り出されます。

「メール！」

「ポポロ！」

ゼンとフルートが飛んできて、少女たちを抱きとめます。

ポポロがフルートの首にしがみついて指さしました。

「見て、フルート！ あれ……！！！」

祭壇から吹き出す風が真っ黒に染まっています。ねじれながら空へ立ち上り、空をすっかりおおってしまっています。あたりが夜のように暗くなつたとたん、屈強の兵士たちが頭を抱えて悲鳴を上げました。すさまじい恐怖に襲われたのです。暗がりの中で、空の闇はさらに濃く暗くなり、寄り集まって一匹の竜に形を変えていきます。ばさりと羽ばたく音がして、巨大な四枚翼が広がります。

「デビルドラゴンだ……！！！」

と勇者の少年少女たちは叫びました。

9

祈祷師に呼び出されて、デビルドラゴンが姿を現していました。祭壇から空へ黒い風になって立ち上り、影の体を次第に濃くしていきます。大きな四枚の翼が羽ばたきを繰り返します。

「コレハコレハ」

と影の竜が首をねじってフルートたちを見ました。同時に地の底から這い上がるような笑い声が響きます。

「コノヨウナ場所デマタ逢エルトハナ。ココハひむかしノ国力。ナルホド、渦王ノ島カラ西ヘ向カツテキタノダナ」

デビルドラゴンは闇の権化なので、聖なる力の中にいるものを見つめることはできません。金の石に守られたフルートたちを、ずっと見失っていたのです。

祈祷師が興奮して歓声を上げていました。

「来たな、この世でもっとも強い妖怪！ さあ、そいつらを倒せ！
空にいる連中も、北軍のヤツらも、残らず討ち滅ぼすんだ！」

「勇者八金ノ石ヲ持ツテイル。我ノチカラガ、マダ足りナイ」

とデビルドラゴンが言いました。影の体の奥で、何かが、ざわりと
うごめいた気がします。

とたんに、ゼンとポポロが叫びました。

「やべえ！」

「よけて、みんな！」

闇の竜の体から、たくさんの黒い鞭のようなものが飛び出してきま
した。闇の触手です。あわててかわしたフルートやゼンたちをかすめ
て、地上へ飛び、うずくまる兵士や馬たちを突き刺しました。兵士は
皆、鎧兜をつけていますが、そんなもので触手を防ぐことはできませ
ん。地上が悲鳴やいななきでいっぱいになります。

自軍の兵士までが触手に襲われているのを見て、南軍の将軍が祈祷
師をどりつけました。

「馬鹿者、何をしている！？ 早くやめさせんか！！」

祈祷師も青ざめています。手を振り回してわめきます。

「よせ！ やめろ！ やめんか、黒竜！」

「あれは黒竜なんかじゃない！ 闇の竜のデビルドラゴンだ！」

とフルートは言い、ポチと一緒にうなりを上げて地上へ飛びました。
炎の剣で次々と触手を切り払っていきます。ポポロはフルートの背中
に顔を伏せて、必死でつかまっています。

フルも必死で飛び続けていました。闇の触手は風の刃では切れませ
ん。自分やゼンやメールを襲われないように、触手から逃げ続けるし
かなかったのです。その間にも地上の人々が触手に襲われ、生気を吸
われてひからびていきます。ちつくしょう！ とゼンがわめきました
が、どうすることもできません。

そこへ行く手から触手の束が飛んできました。あまり速すぎて、ル
ルにもかわすことができません。とつさにゼンが自分の体でメールを
かばいます。

すると、その前に天狗が飛び込んできました。杖を掲げて気合いを
込めると、神通力で触手が跳ね返されます。

「ありがとよ、天狗！」

とゼンは言うつと、剣で戦い続けているフルートへどなりました。

「多すぎてとても手に負えねえ！ 金の石を使え、フルート！！」

フルートはうなずき、すぐに空いている手で胸のペンダントをつか
みました。闇の竜へかざして叫ばうとします。

「金のい！」

ところが、フルートの頭上からいきなり怪物が襲いかかってきまし
た。全身を鋼のような毛におおわれた大男です。太い手や腕には数え
切れないほどの目があります。

「行け、百目鬼！ そら、そいつを空からたたき落としてやれ！」

祈祷師が地上から言いました。また新しい怪物を呼び出したのです。
怪物がポポロにも襲いかかるので、フルートは金の石を使えなくな
りました。剣をふるって怪物を撃退しようとしています。

そこへゼンが飛んできました。百の目がある怪物の腕に、刃のよう
な毛は生えていません。ゼンはそこをつかんで怪物をフルートから引
き離しました。そのまま空中で振り回し、地上へ投げ落とします。

けれども、フルートが金の石を使おうとすると、また別の怪物が襲っ
てきました。今度は全身緑色の子どものような姿をしています。口が
鳥のくちばしのように尖り、手足には水かきが、毛がない頭のとつべ
んには丸い皿のようなものがあります。それもゼンが捕まえて投げ飛
ばすと、今度は燃えさかる車輪が回転しながら現れます。

「きりがねえぞ！」

とゼンがわめきました。

「怪物を呼び出す大元をたたかなくちゃダメさ！」

とメールも言います。

丘の上の祭壇では、祈祷師が次々と新しい怪物を呼び出してしました。その間にもデビルドラゴンは触手を伸ばし、人間たちから生気を吸い取っているのです。空の闇がますます濃く大きくなっていきます。

「祭壇を壊す！」

とフルートは急降下していきました。祭壇へ炎の弾を撃ち出そうとしますが、とたんに黒い触手に襲われました。デビルドラゴンに妨害されたのです。ポチが体を回転させて触手をかわします。そこへまた何匹もの怪物が襲いかかってきます。

攻撃をかわして飛び続けるポチの背中に、フルートはしがみついています。飛ぶスピードが速すぎて何もできません。ポポロはそんなフルートにつかまっています。急に、ぎゅつと強くフルートの体を抱きしめました。驚くフルートに、後ろから身を乗り出してささやきます。

「考えがあるの。聞いて……」

かわいらしい顔が息もかかりそうなくらい接近したので、フルートが思わず赤くなります。

間もなく、フルートとポポロを乗せたポチが、怪物を引き連れたままルルの方へ飛んできました。すれ違いながら、フルートが言います。

「ゼン、少しの間、こいつらを頼む！ 天狗さん、こっちへ！」

と怪物の集団を親友に任せて天狗を呼びます。ところが、天狗がフルートの元へ飛んでいくと、また別の方向から怪物が襲いかかってきました。天狗とよく似た姿をしています。一回り小柄で、顔の真ん中に尖ったくちばしがあります。広げた翼でさばさとフルートたち

をたたき、奇声を上げてつかみかかってくる。

「カラス天狗！ おまえまで操られておるか！」

と天狗が大声を上げました。カラス天狗に邪魔されて、フルートから引き離されてしまいます。

フルートは迫ってくる怪物へ必死で剣をふるい続けました。何度か金の石に、光れ、と言いましたが、周りを怪物に取り囲まれているので、光がさえぎられてしまいます。群がってくるのは、皆、闇の怪物ではないのです。聖なる光はデビルドラゴンに届きません。

すると、突然ゼンが声を上げました。

「危ねえ、天狗！」

丘の上に舞い下りて祭壇へ駆け寄ろうとしていた天狗に、デビルドラゴンが闇の触手を飛ばしてきたのです。天狗が振り向き、きわどいところで触手を避けました。次の触手が伸びてきたので、あわててまた空へ飛びたちます。

メールが歯ざしりしてわめきました。

「なんとかして祭壇を壊さなきゃ！ あたいがやる！ ゼン、あたいを下ろしなよ！」

「馬鹿言え！ この状況でどうやってあそこまで行くんだよ！？」

とゼンがどなり返します。周囲は呼び出されてきた怪物でいっぱいですが、空からは闇の竜が見張っています。それらをかかわして祭壇までたどり着くのは不可能でした。

「ポポロ！ こんな時こそあなたの魔法よ！ なんとかならないの！？」

とルルがポチを振り向いて、あらっ？ と目を丸くしました。ポチに乗って怪物と戦い続けているフルート。その後ろに、黒衣の少女は乗っていないのです。

「フルート ポポロはいつたい？」

すると、突然丘の上の祭壇から声が聞こえてきました。

「ローデローデリナミカローデ……」

祭壇のそばには祈祷師の老人がいるだけです。將軍やお付きの兵たちは皆、頭を抱えて丘の上に伏せて、恐怖に震えています。他には誰もいないはずなのに、少女の声が聞こえてくるのです。

空からデビルドラゴンがほえました。

「ソノ声八ぼぼろ　！　祈祷師、声ノ元ヲ確カメロ！　祭壇ヲ破壊サレルゾ！」

老人は飛び上がり、声の聞こえる方へ腕を伸ばしました。そこには何も見えませんでした。が、闇雲に手を振り回すと何かが触れました。捕まえて引っぱると、呆気ないほど軽い手応えと一緒に、薄絹の肩掛けが祈祷師の手の中に現れます。

続けて、祈祷師の目の前に人が現れました。きらめく黒い衣に赤いお下げ髪の少女です。その片手はまっすぐ祭壇に向けられていました。

「セワコーオンダイサー……」

呪文と共に上空の闇を引き裂いて、稲妻が降ってきました。祭壇を直撃して、あたりを真っ白に照らします。

とたんに、祭壇は木っ端みじんになりました。轟音が響き渡って、猛烈な風が巻き起こります。

そこに叫び声が重なりました。

オオオオオオオオ……

デビルドラゴンの咆吼です。影の体が黒い風になり、壊れた祭壇に吸い込まれていきます。

それを見て、フルートはペンダントをつかみました。周囲の怪物たちも同じ風に巻き込まれて祭壇へ戻っていきます。邪魔者がいなくなつた空へ金の石をかざして叫びます。

「光れ……」

先の雷に負けないほどの光が輝き渡りました。空をおおうデビルド

ラゴンがたちまち薄れていきます。再び、竜の咆吼が響き渡りました。空と大地を震わせて、消えていきます

風が完全に収まって、空からまた日差しが降りそいできました。青空にはもう闇の竜はいませんでした。呼び出された怪物たちも、もう一匹も見当たりません。後には壊れた祭壇と、死んだように倒れている祈祷師の老人、そして、頭を抱えて地面に伏せる兵士たちが残っているだけです。

祭壇の近くに天狗が立っていました。明るくなった空を見て、腕の中からポポロを放します。周囲には強風に飛ばされてきた石や木の枝が転がっていますが、ポポロは天狗に守られていたので、かすり傷一つ負っていませんでした。

天狗が足下に落ちていた薄絹の肩掛けを拾い上げました。

「オシラの織つた絹が役に立つたな。着れば姿を隠してくれるんじや。わしもこれを織り込んだ隠れ蓑かぶせをオシラに作ってもらったぞ」

とポポロに手渡してくれます。ポポロはその薄絹で姿を隠して、祭壇まで天狗に運んでもらったのです。

すると、ひゃっほう！　と空から声がしました。二匹の風の犬が少年少女を乗せて近づいていました。

「やったな、ポポロ！」

「やつぱり大トリはあんただよね！」

とゼンとメールが歓声を上げ、ワンワンワン、と犬たちがほえます。

「ポポロ　！」

笑顔で空から舞い下りてきたフルートに、ポポロはにっこりほえみ返しました。

「さてさて。わけのわからん式神は消えだし、デビルドラゴンも去った。あとはこの人間どもをどうするかだな」

戦いが終わった地上を見て、天狗がそう言いました。

丘の上には祭壇の残骸が飛び散り、祈祷師の老人が倒れています。南軍の將軍は部下の兵士と一緒に、地面で腰を抜かしていました。天狗やフルートたちが次は自分たちを殺すだろうと考えて、真っ青になっています。

そこへ、ゼンがルルに乗って飛んで来ました。

「こいつらに説教してやるんだろ？ 面倒がねえように連れてきてやっただぞ」

と一人の男を、ぼんと天狗の目の前に放り出します。立派な鎧兜を身につけた、北軍の將軍です。ゼンに猫の仔のようにつり下げられ、風の犬で空を運ばれてきたので、やはり腰を抜かして立ち上がれなくなっています。

「わしは説教はせん」

と天狗は苦笑いして言いました。

「それはわしらには許されておらんからな。それは金の石の勇者の役目じゃ」

急に話を振られてフルートは目を丸くしましたが、すぐに真剣な表情になると、將軍たちへ話し出しました。

「ぼくたちは金の石の勇者の一行です。デビルドラゴンを倒す方法を探して、この世界を旅しています。デビルドラゴンというのは、あの影の怪物のことです。人の憎しみや怒り、恨みといった気持ちで強大になっていく、悪の権化です。どうか戦いをやめてください！」

そんなことをしていたら、また奴を招き入れることになって、今度こそヒムカシの国が滅ぼされてしまいます！ ヒムカシだけでなく、世界中の国や人も全滅させられます！ あいつはすべての破滅を望む闇の竜なんです。お願いです、戦いをやめてください……」

フルートは必死で話し続けました。あまり上手な説得ではないような気がしますが、戦いを止めたい、闇の竜からこの国を守り、一つ目小僧のような悲しい子どもたちが生まれてこないようにしたい、そんな想いのほうが先に立ってしまって、ことばが充分に浮かんでこないのです。

けれども、その懸命さは將軍たちにも伝わりました。地面に座り込んだまま互いの顔を見合わせ、やがて、南軍の大將が先に口を開きました。

「あの影の怪物は我が軍の兵を大勢殺した。北軍でもそうであったか？」

「ああ。何十という兵があつという間にやられて、死体さえ残さずに消えてしまった。勇敢なはずの將たちが、一人残らず覇氣を吸い取られて、立ち上がる事ができなくなっていた。実に恐ろしい怪物だ」

と北軍の大將が答えます。

「では、あれはわしらに共通の敵か」

「そのようだな……殿にお知らせせねば」

「わしらもだ。急ぎ知らせて備えをせねば」

ついさっきまで敵に別れて戦っていた両軍の將が、さらに大きな共通の敵に気がついて、同じ行動をとろうとしていました。

フルートは言い続けました。

「南軍も北軍も、それぞれの王様に伝えてください。あいつは必ずまた襲撃してきます。それはこの国かもしれないし、また別の国かもしれないけれど、戦いが広がれば、必ずこの国も巻き込まれてしまいます。ヒムカシに住むものは、大人も子どもも、妖怪も獣も、命あるも

のすべてが殺されてしまっんです。 そんなことは駄目です！ 絶対に駄目なんです！」

「やっぱりうまいことにはなりません。」

それでも、北と南の將軍はうなずきました。フルートに向かって承知した、と答えようとします。

すると、老人の聲がさえぎりました。

「愚か者の大将が。これが敵に勝つ千載一遇の好期だと、どうして気がつかないのだ。あの闇の竜の力は絶大だ。あれをつかえば、北軍などたちまち打ち破れるのだと、何故わからん！」

祈禱師が正気に返っていました。地面から起き上がり、笑いながら言い続けます。

「あれしきの闇に怖じ気づいて戦いをやめるとは、普段武士だといばりくさっていても、大したことはないな。その北軍の大将を捕らえるんだ！ わしはあの竜をもう一度呼び出してやろう！ さすれば、北軍は総崩れ、ヒムカシは明日にもわしらの天下だ！」

フルートたちは息を呑みました。北軍の大将が真っ青になります。

祈禱師の言つとおり、彼は敵陣のただ中に一人きりでいます。あつという間に人質にされる立場だったのです。ためえ、何を とゼンが祈禱師に殴りかかろうとします。

すると、それより早く南軍の大将が言いました。

「わしらは人質は取らぬ。我らの本当の敵は、あの闇の竜。あれは人の力で操れるような妖怪ではない。利用しているつもりで、こちらが利用され食らいつくされるのは自明。おまえこそ、己の立場を見誤るな。おまえは帝でも大將軍でもないのだぞ」

と祈禱師を叱りつけますが、老人は耳を貸しませんでした。笑いながら言い続けます。

「帝になつてやるともよ！ わしが新しいヒムカシの帝だ！ 妖怪

どものように、おまえたちもこき使つてやる！ 闇の竜の力をわしのものとしてな！」

それを聞いてフルートは苦しそうに顔を歪めました。祈禱師のことは、歴代の魔王たちとまったく同じでした。心に野望を抱く人間は、闇の竜に接触すると、同じことを考え始めるのです。闇の力を使って天下を取ろう、と。

南軍の大将がどなりました。

「愚か者が！ 貴様はヒムカシの国を滅亡に導くぞ！ そんなことはさせぬ！」

自分の部下だった祈禱師へ、刀を抜いて切りつけようとします。

すると、その目の前で祈禱師の姿が消えました。一瞬で見えなくなつたのです。天狗が自分の杖をそちらへ掲げていました。

「これ以上殺し合いをするな、人間たちよ……。奴は別空間にある裁きの迷宮へ送つてやったわい。罪人を送り込む、いにしえの牢獄じゃ。心正しい者ならばすぐ出られるが、邪な想いを持つ者は、その想いが消えぬ限り、絶対脱出することができん。あの男が再びこの世に戻るかどうかは、奴次第だな」

北と南の大将は意味が分からなくて、目を丸くしました。北軍の大将が尋ねます。

「それはつまり、どういふことなのだ？」

「要は、天狗に神隠しにされた、ということじゃ」

天狗は答えて静かに笑いました。

それから数時間後、戦場から離れた川辺で、フルートたちは天狗に別れを告げていました。

「どうしても、わしの山には戻らんのか？ 一つ目小僧たちががっかりするだろうに」

と残念がる天狗に、フルートは言いました。

「ぐずぐずしていられないんです……。デビルドラゴンには、ぼくたちがここにいと知りました。ぼくたちを倒そうとして、また襲ってくるかもしれないから、一刻も早くヒムカシを離れなくちゃいけないんです。本当にお世話になりました。オシラさんたちにもよろしく伝えてください」

「でもさあ、戦争が本当に終わるかどうかわかめられなかったのは残念だよ。平和になるのを見届けたかったな」

とメールが言うと、ゼンが腕組みしました。

「それだ。北と南の大將たちは、もう戦争はやめると言って握手までしてたけどよ、その上にいる王様どもが承知しなかったら、結局戦争は終わらねえんだろ？ 大丈夫なのかよ」

「ワン、きつと大丈夫ですよ……。あの將軍さんたち、戦いをやめさせてデビルドラゴンに備える、ってものすごく強く決心してたし、戦場の兵士たちも、デビルドラゴンには本当に怖い想いをしたみたいだし。みんなの話を聞けば、王様たちだつてきつと、何をすべきか気がつきますよ」

「ヒムカシの国を二人の王様で治めればいいのよね。東と西の大海を二人の海の王様が治めてみたいに」

とポチやルルが言います。

天狗はうなずきました。

「この先、ヒムカシがどうなっていくか、帰ったらオシラにまた占ってもらうことにしよう。おまえたちのこの先の旅路のことも……。息災でいけよ、勇者たち。むしろはヒムカシの地と共に生きる者になっているが、世界に危機が迫ったときだけは、ヒムカシの住人と一緒に参戦することが許されておる。きつとおまえたちの応援に駆けつけるからな」

「妖怪軍団か？ すげえ応援だな！」

とゼンが声を上げれば、フルートも言いました。

「ありがとうございます。その時には、よろしくお願いします」
少女のように優しい顔でほえみます。

見送る天狗に手を振って、少年と少女たちは風の犬で飛びたちました。あつという間に空の高い場所まで昇っていきます。

「で 次はどこに行くんだよ、フルート？」

「このまま当てもなく飛ぶわけにはいかないだろ！？」

ルルに乗ったゼンとメールが尋ねると、ポチの上からフルートが答えました。

「もつと西へいくよ。最初に天狗さんが教えてくれただろ？ ここはユラサイの東にある島国だ、って。海を越えた西に、ユラサイ国があるんだよ。ポポロに方角を確かめてもらって、そこへ行ってみよう」
フルートの後ろからポポロがうなずきました。自分をあてにされたので、嬉しそうに頬を染めています。

ひゃっほつ！ とゼンとメールは歓声を上げました。

「いよいよユラサイか！ 名前は何度も聞いてたけどよ、ついにその国まで行くんだな！」

「どんな国だろうね！？」

とメールも目を輝かせます。

「ワン、大きくて古い国ですよ。不思議な生き物や魔法もたくさんあるって」

とポチが答えたので、ルルが聞き返しました。

「不思議な生き物？」

「ワン、竜だよ。それも、空を飛ぶ大蛇のような竜なんだ。他にもさまざまな竜が棲息してる。ユラサイは、竜の棲む国っても言われてい
るんだよ」

竜の棲む国 とフルートたちは繰り返しました。彼らは闇の竜の

倒し方を探しています。竜の国ならば、手がかりが見つかるかもしれません。

フルートは言いました。

「よし、行こう！ ユラサイに 竜の棲む国に！！」

おう！ と仲間たちがいつせいに答えます。

ヒムカシの国には山と緑が延々と続いています。それを眼下に眺めながら、一行は西へ西へと飛んでいきました。

(2009年9月28日)